

2014年(平成26年)3月25日

## 病院長からの一言

— 2014年度を迎えるにあたって —

弘前大学医学部  
附属病院長 藤 哲



今、大学は【国立大学改革プラン】のもと、1. グローバル化、2. イノベーション機能強化、3. 人材・給与システムの弾力化を推

進すべく、27年度までを改革加速期間と位置づけています。平成28年度から始まる第3期中期目標期間において、持続的な競争力

を持つ『高い付加価値を生み出す国立大学』となる事が大学に求められています。その為の予算措置として運営交付金を3-4割重点的に付加するとしています。これはつまり何もしなければ、6-7割になりますよというメッセージです。附属病院として何が出来るか、職員の皆さんからのお知恵を拝借したいと考えています。

さて、附属病院の2014年度の達成事項は、まずは青森県地域医療再生計画に係る4採択事業の実施です。青森県感染対策協議会設置事業(採択1)ならびに細菌検査情報共有分析システム整備事業(採択2)は、既に感染制御センターを中心に進められ、地域の医

療機関の感染対策強化に貢献していますがさらなるネットワーク作りを目指しています。女性医師等勤務環境整備事業(採択3)として、病院正面・臨床研究棟寄りにコミュニケーションルームを新築し、女性医師の勤務環境の向上をめざします。脳神経外科病棟に6床の脳卒中集中治療室(SCU)を設置し(採択4)、診療体制の充実を図る予定です。

その他、業務運営の効率化を推進するため、電子カルテの運用を開始するとともに、より詳細な経営分析を可能とし、経営改善を図る必要があります。そのスムーズな遂行の為に各診療科から財務を担当する医師を推薦してもらいま

した。一方、2014年度の診療報酬改定は、8%増税分への手当を考慮しても、実質1.26%の引き下げとなりました。運営費交付金も減少し、特定機能病院要件や入院基本料7:1要件の厳格化など厳しい新年度になりますが、職員の皆さんと共に、ここでしかない治療を患者さんに提供する為に努力したいと思います。

最後になりますが、昨年11月7日に行われた国民保護法による災害訓練の動画が内閣官房国民保護ポータルサイト(<http://www.kokuminhogo.go.jp/movie/index.html>)から見る事ができます。迫力ある画像をお楽しみください。

## 各診療科等の紹介

【看護部】



看護部では、「患者さん・ご家族との相互理解を図り、優しさと思いやりのある看護の提供」等を理念・基本方針に掲げ、地域の皆様へ質の高い看護サービスの提供に日々努めております。

さて、看護部は、病院の中で職員数が一番多い組織であり、看護職、看護助手を合わせると、600名程度の職員がおり、認定看護師は13名となりました。34歳以下の職員が半数以上を占め、平均年齢は年々若くなっています。ここ1~2年は、40~50名程の新人看護職員が入职しており、なかでもナースマンが年々増え現在31名となりました。ナースマンの活躍にも期待するところです。

看護職の教育に関しては、「人間性と専門性豊かな看護職を育成する」ことを教育方針として、看護実践能力および教育力の育成に力をいれ、確かな知識と安全・安心な技術、そして高い倫理性を育成する教育プログラムを実施しています。平成24年度からは、弘前大学看護職教育キャリア支援センターに教育担当看護師長と教育支援者を配置して教育の支援を行っております。

また、看護部では、質の高い看護サービスを提供するため、看護の質のデータベース化を開始しています。精度向上のため評価指標の定義の明確化および分析・改善へのシステム作りに取り組んでお

り、さらなる看護サービスの質向上に向け活動しています。

働きやすい職場環境づくりの一つとして「ノー残業デー」推進の取り組みや、接遇推進活動を行っております。現在は、育児部分休業などの育児支援制度を利用する職員も増え、多様な勤務形態を選びやすくなりつつありますが、今後、看護職が安心して働き続けられる職場環境を整備して、看護職の定着を図っていききたいと思っております。

今後とも、行き届いた看護ケアを提供できるようスタッフ一丸となって取り組んで参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 遠隔操作型内視鏡下手術システムダ・ヴィンチ 2台目の導入

本院では2011年4月に東北・北海道の医療施設では最初となる遠隔操作型内視鏡下手術システム：ダ・ヴィンチSを導入しました。お陰様で順調に症例を重ね、前立腺全摘除術156件、膀胱全摘除術11件、回腸新膀胱造設術5件、腎部分切除術5件、婦人科悪性腫瘍手術15件、子宮全摘除術12件、胃癌手術2件、腓胝体尾部切除術6件、胆嚢摘除術1件を実施するに至っております。2012年12月14日には本邦第1例目となる膵癌と腎癌合併例に対する膵胝体尾部切除・腎部分切除同時手術を行いました。患者さんはBMIが30を超える方でしたが、安全・確実で低侵襲な手術を実践することができました。また、膀胱全摘除術後の回腸新膀胱造設をすべて腹腔内操作で作成するintracorporeal ileal neobladder法は国内で本院のみが実施可能な高難度手術です。他施設に類を見ないダ・ヴィンチ専用手術室や手術トレーニングシステムも充実しており、本院は日本をリードするロボット手術実力病院へと成長を続けております。

ロボット手術の適応は拡大傾向で、従来開腹で行われていた泌尿器科手術のほとんどがロボット手術に移行する可能性があります。

前立腺全摘除術の患者さんのほとんどがロボット手術を希望され、現在半年待ちの状態です。消化器外科、婦人科領域でも手術件数は増加することが確実です。また、心臓外

科、耳鼻咽喉科、整形外科、脳神経外科でもロボット手術への期待が高まっております。

欧米諸国ではすでに最新機種ダ・ヴィンチSiが普及しておりますが、2012年10月1日、本邦でもダ・ヴィンチSiが医療機器として承認されました。Siの特徴は、①超音波駆動メスを装着可能であること、②術者コンソールが2つ装備されていること、③術者コンソールがコンパクトになったことです。特に②は手術指導に威力を発揮します。指導医と若手医師が同じ3D画面を見ながら手術ができ、フットペダルを一踏みすると操作権がコンソール間で移動できます。このような状況を踏まえ、本院では2台目の手術用ロボットとして新型のダ・ヴィンチSiを導入しました。本年2月から本格稼働し、ダ・ヴィンチSと2台体制で運用しております。

ダ・ヴィンチSiの導入により患者さんの手術待機日数が短縮され、地域医療に大きく貢献することが期待されます。また、ダ・ヴィンチSiは手術教育にも威力を発揮しますので、若手医師、研修医、学生の手術教育においても大きな効果が期待されます。

(泌尿器科長 大山 力)



## 平成25年度国立大学附属病院長会議「東北・北海道地区会議」を開催



平成25年度国立大学附属病院長会議「東北・北海道地区」会議が、去る1月23日に弘前大学が当番校となりベストウエスタンホテル

ニューシティ弘前において開催されました。

会議には、北海道、旭川医科、東北、秋田、山形及び弘前の6大学の病院長、副病院長、事務部長及び担当課長が参加しました。

開催に当たり、当番大学の藤病院長から挨拶があり、引き続き議長として選出され「特定機能病院承認要件の見直しにおける臨床研究や医師主導治験の推進のための支援方策について」「新・専門医制度にかか

る対応について」活発な協議が行われ、また「将来像実現化行動計画2013の取組状況について」「東北地方に医学部が新設された場合の影響について」などについて、各大学の取組状況や今後の方策・提案について種々意見交換が行われました。

なお、会議終了後に行われた情報交換会では、和やかな雰囲気のもと闊達な情報交換が行われ、今後に実りあるものとなりました。

次回当番校は北海道大学となります。(総務課)

## 先憂後楽

ディープなハイ・コンテクスト文化はrisky?



医療安全推進室長 福井康三

3月をもって附属病院を退任することになりました。平成19年に専任リスクマネージャーを拝命以来、7年間にわたりご支援、ご協力をいただきました職員の皆様と関係諸氏に心より感謝申し上げます。

これまでの医療安全活動を通じて、最近、感じていることを書かせていただきます。米国の文化人類学者エドワード・ホールが、「ハイ・コンテクスト文化」と「ロー・コンテクスト文化」という考え方を示しています。ここで「コンテ

クト」は「共通の価値観・背景」という意味です。ハイ・コンテクスト文化ではコンテクストの共有性が高く、言葉足らずでもその意図を相手が察してくれます。まさに「あうんの呼吸」の日本語文化です。いっぽう、ロー・コンテクスト文化は価値観や背景の共有度が低いため、明確な言葉で伝えなければ意思疎通は困難です。英語文化がこれに相当します。さて、医療安全のことですが、いろいろな場面でのコミュニケーションエラーに起因するインシデントが、

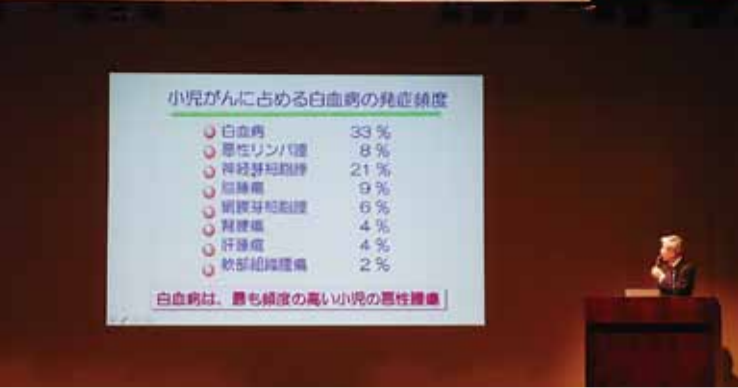
本院でも非常に頻度が高い現状があります。その多くは、伝えたい内容をもっと具体的に、ポイントを明確に表現すれば誤解が生まれず、防ぎ得たものです。これらのインシデント発生にはいろいろな要因が考えられますが、根底に、津軽弁の『「ドサ?」「ユサ!』で象徴されるディープなハイ・コンテクスト文化があるように思われるのです。無味乾燥なロジカルな話し方は受け入れがたい面がありますが、グローバル化が求められるビジネスの世界では必要なスキ

ルとされており、医療においても同様です。医療者も患者さんたちもこの地域の文化的特性を共有していることは、医療を提供するうえで「強み」でもあります。時にはコミュニケーションの面でリスクにもなり得ます。ハイ・コンテクスト文化の中で、どのようにロー・コンテクスト コミュニケーション力をつけていくかが今後の課題のように思います。

最後に、弛まぬ医療安全活動により質の高い医療を提供し続けまことを祈念いたします。

### 第7回 弘大病院がん診療 市民公開講座を開催

#### 第7回 弘大病院がん診療市民公開講座



腫瘍センターでは年1回、市民の皆様を対象とした「弘大病院がん診療市民公開講座」を開催していますが、7回目となる今年度は、平成25年11月9日ヒロロ4階『弘前市民文化交流館』において開催しました。弘前市を中心に42名の市民の皆様の参加を得ました。



はじめに放射線科教授の高井が「がん治療における最近の放射線治療の進歩」のタイトルで講演を行い、定位放射線治療法、強度変調放射線治療法や粒子線治療法をわかりやすく説明しました。続いて、小児科の伊藤悦朗教授が「造血幹細胞移植を用いた小児がんの治療」について講演されました。最近の白血病治療の進歩とその問題点、および今後の方向性について解説されました。演者が壇上に登って行われた講演後の質疑応答では、自らない身近な方の癌治療に対する疑問や不安をもたれている方々から、放射線による癌治療相談、小児癌の治療相談について多くの質問が行われました。当日行ったアンケートには、36名の方から回答が得られまし

た。(回答率86%)  
以下のいくつかを紹介します。「講座を受けることにより新しいことを勉強し、知識を得ることが有難く思っています」「治療法の進歩のみならず、治療金額もさりげなく話して下さったのでとても参考になりました。感謝」「大分気持ちが楽になりました。ありがとうございます」「正常細胞を守りながら癌細胞をたたく照射方法があることを知りました。目からウロコでした」「ダウン症の遺伝子細胞などの講義がおもしろかった」最後に、分かりやすい講演をして頂いた演者の皆様と参加された市民の皆様深く感謝致します。(腫瘍センター長 高井良尋)

### 平成25年度弘前大学医学部附属病院 診療奨励賞授賞式が行われる

第16回附属病院診療奨励賞授賞式が医学部各授賞式と共に、平成26年1月31日に医学部コミュニケーションセンターで執り行われました。式では受賞者に、大熊副院長から本賞の楯及び副賞として一般財団法人弘仁会から寄附金が贈呈されました。今年度は診療技術賞、循環器内科(代表富田泰史 外41名)の「心電図モニター適正運用に向けた取り組み：モニターアラームの現状とその対策」、心のふれあい賞、第一病棟3階(代表石川千鶴子 外33名)の「固定用テープの手書きのイラストから伝わるやさしさと思いやり」が受賞しました。授賞式に引き続き、祝賀会が同センター内で和やかに行われました。



#### 心電図モニター適正運用へ向けた取り組み：モニターアラームの現状とその対策

第一病棟7階病棟スタッフ一同  
棟方栄子、菊池昂貴、山口峰、相馬真理子、高田直美、木村素子、秋元伸枝、前田瑞穂、高屋敷いくえ、中嶋公美子、工藤菜穂子、佐藤みな、佐藤明日香、清藤祐輔、北沢健太、中村理奈、吉田弥生、梅津めぐ、成田真里子、倉内奈々、木村明、上野由美子、北山紗希、伊藤俊輔、小野詩歩、竹下怜那、中村好、藤岡香織、時苗文子、富田泰史、榎拓末、阿部直樹、山田雅大、横山公草、花田賢二、澁谷修司、藤井裕子、佐々木真吾、木村正臣、堀内大輔、佐々木憲一、伊藤太平

○診療技術賞を受賞して  
代表 循環呼吸腎臓内科学講座 富田泰史  
この度は、附属病院診療奨励賞診療技術賞を受賞させていただき誠にありがとうございます。選考委員の諸先生方ならびに関係者の皆様、第一病棟7階スタッフを代表致しまして心より御礼申し上げます。  
第一病棟7階は、循環器内科ならびに心臓血管外科の混合病棟であり、多くの入院患者さんに心電図モニターが装着されており、看護師をはじめとするスタッフはモニターアラーム音が鳴るたびにモニターに駆け寄り、波形を確認し、必要があれば患者さんの元に走っていき、バイタルサインを確認しています。しかし、多くは不整脈ではなく、体動やノイズ、電極の接触不良などに伴う不

整脈とは関係のないアラーム、いわゆる“無駄鳴り”です。アラームは突然鳴るため、それまでの作業を一旦中断せざる負えなくなり、そのため労働環境は低下し、さらに度重なる無駄鳴りはアラームへの関心を低下させ、インシデントやアクシデントにつながります。  
そこで無駄鳴りに関する心電図モニターアラームの現状を把握するために、病棟スタッフのアラーム解除頻度ならびにリコールに記録されているアラーム作動の原因を連続3日間記録しました。その結果、1日平均29人の患者さんに心電図モニターが装着され、病棟スタッフは1日平均551回のアラーム解除を行っていました。そのほぼ8割は無駄鳴りでした。特に無呼吸アラームは、非常に感度が高いため、頻回に鳴っておりました。この設定をオフとし、さ

らに不整脈に関する設定も一部変更致しました。その後再び連続3日間記録したところ、1日平均アラーム解除回数は79回となり、551回から激減致しました。無駄鳴りの減少により、スタッフの労働環境は改善され、アラーム音にもさらに集中できるようになりました。実際に以前は常に鳴り響いていたアラーム音が激減したため、違う病棟にいるのではと錯覚するスタッフもおります。  
今回の受賞を励みとして、心電図モニター適正運用へ向けた取り組みをより一層推進致したいと存じますので、今後とも御指導、御鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。最後に、今回の診療奨励賞応募に際し、御推薦頂きました奥村謙診療科長に、この場を借りて深謝申し上げます。

#### 固定用テープの手書きのイラストから伝わるやさしさと思いやり

第一病棟3階  
石川千鶴子、成田牧子、三上ゆみ子、工藤晶子、増田美也子、花田幸子、佐々木香奈子、工藤和子、工藤千晶、一戸亜紀子、佐々木淑恵、森田章、西村志津恵、松本和可子、伊東美恵子、高杉裕美、工藤あゆみ、齋藤真結子、佐藤奈津美、餅田佳奈美、菅原美奈子、古川翠、古川由季野、小杉麻里子、工藤真実、山口瑞恵、小笠原翠、佐藤綾香、菊池沙貴、奥崎さおり、五十嵐諒、蛭名詩織、白戸順子、藤田真理子

○心のふれあい賞を受賞して  
代表 第一病棟3階 石川千鶴子  
この度、医学部附属病院診療奨励賞心のふれあい賞を受賞させて頂き、誠にありがとうございました。診療奨励賞の選考にご尽力を頂きました石橋選考委員長はじめ

多くの皆様心からお礼を申し上げます。  
第一病棟3階は、平成23年度に続いて二度目の受賞となります。このことは、一度目の受賞に甘んずることのないスタッフ達のひたむきな努力の成果だと思っています。そこには、つらい治療と向き合う子どもたちとご家族への深い愛情があふれています。第一病棟3階には、持続点滴や経管栄養を行っている子どもたちがたくさん入院しています。そのチューブ類の固定用テープには、角を丸めて剥がれにくいように工夫をしていることはもちろんですが、1枚1枚に手書きのイラストを描いています。手書きのイラストは、既製品ではありませんので1枚として同じ物はありません。スタッフが普段のコミュニケーションから、その子の好みを把握して作

成しています。子どもたちは嬉しそうに見せ合い、ナースステーションに見せに来てくれます。そのイラストが描かれたテープは、子どもたちにとって大切な宝物なので自分で剥がすことや点滴のチューブを引っ張ることはありません。ご家族からも「毎日、違う絵が描かれていて、その絵に癒されスタッフの心配りに励まされます。」とお手紙をいただきました。私達は今後も入院期間の長い、厳しい治療を頑張る子どもたちへエールを込めてテープの作成に取り組んでまいります。  
この度の受賞は、大学病院に勤務するたくさんの職種の皆様からのご支援があつたの受賞と思っています。私達は、これからも皆様からのご支援・ご指導を受けながら優しさと思いやりのある丁寧な看護を続けて行きたいと思っております。

### 平成25年度医学教育等 関係業務功労者表彰を受賞して



平成25年11月21日、東京青山のホテルにて下村博文文部科学大臣他の来賓臨席のもと表彰の栄誉をいただきました。当日は全国から、医学・歯学教育関係と大学病院関係の93名の参加がありました。国歌斉唱から始まった式典は表彰状の授与・記念品の贈呈、大臣挨拶、来賓祝辞、受賞代表者謝辞で閉式となりました。その後は全員で記念撮影し終了となりました。  
看護師になって39年が経ちました。泌尿器科病棟、第一外科病棟、第二内科病棟、第二内科外来、小児科病棟、小児科外来と経験させて頂きました。尊敬できる上司にも巡り合い同僚にも恵まれ、幸せな看護師生活だったと思っています。そこにこのような名誉を頂き本当にうれしく思っています。家族、とりわけ母が喜んでる姿を見て親孝行ができたと思えました。  
この春に定年を迎え看護師生活を卒業しますが、これまで培った

経験や看護の心を忘れることなく、これからの人生に生かしていきたいと思っています。これまで多くの皆様と出会い助けられ支えられました。患者さんやその家族にも教えられたことがたくさんあります。そのすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。(看護部 小児科・小児外科外来 副看護師長 成田牧子)

### ●●● 研修医のひとりごと ●●●

#### 二年目研修医 横山美奈子



私は青森県内で獣医師として働いていましたが、出産を機に産婦人科医を目指し平成20年4月に弘前大学医学部に学士編入しました。卒業後、弘前大学医学部附属病院卒後臨床研修Cプログラムを選択し、一年目は健生病院で内科、救急、小児科等について学び、二年目は本院で産科婦人科を中心に研修をさせて頂きました。指導医やコ・メディカルの方々に手厚くご指導いただき充実した日々でした。県内外から本院での治療を必要とする方々が集まり、それに対して最善の治療を尽くすこの病院で学べたことを幸せに思っています。時には治療に難

渋し自分の無力さに落ち込むこともありましたが、治療を終え退院される方や、無事に出産し新しい命をいとおしそに見つめる方々の笑顔に助けられています。  
二年目の研修医は九名おり、それぞれが将来を見据えた診療科を中心に研修をさせて頂きました。研修医室では時折、研修医同士で診断や治療方針について話し合う機会もあり、非常に有意義な時間でした。しかしながら、4月からはそんな頼もしい仲間と離れることとなります。ご指導いただいた多くの方々から学んだ知識・技術をもとに県内の病院で産婦人科医としての経験を重ねていければと思っています。  
最後になりましたが、卒後臨床研修センターの皆様、ならびに各科のスタッフの皆様、一年間ありがとうございました。今後とも研修医一同、よろしくお願ひいたします。

### 【編集後記】

南塘だより第73号をお届けします。原稿をお寄せいただきました皆様には心より感謝申し上げます。豪雪だった昨年に比べ、今年の冬は雪が少なく過しやすい冬でした。もうすぐ春、桜の季節が待ち遠しいです。さて、17日間にわたる雪と氷のスポーツの祭典「ソチオリンピック」では、連日連夜にわたり熱戦が繰り広げられました。私も時々TV観戦を楽しみ、選手の活躍に胸を熱くし、華麗な演技に感動していました。クロスカントリー競技でロシア代表選手のスキー板が破損しライバルチームの手助けでゴールしたシーンには、友情、連帯、フェアプレーの精神をもって相互理解しあうオリンピック精神を感じました。世界の平和を祈る今日この頃です。(病院広報委員 N.O)